

新聞4 コマ漫画が描く菅直人首相（後編 - 2） 首相在任期間中の3 大紙の4 コマ漫画に関する一分 析 2010～2011

著者	水野 剛也
著者別名	MIZUNO Takeya
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	55
号	1
ページ	21-41
発行年	2018-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009350/

新聞 4 コマ漫画が描く菅直人首相（後編 -2）

—首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2010～2011—

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 4): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010–2011

水野 剛也

Takeya MIZUNO

はじめに 前編・中編・後編 -1 の要約と後編 -2 のねらい

本論文は、菅直人首相の在任期間中（2010年 6 月 8 日～2011年 9 月 2 日）に 3 大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての 4 コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第52巻・第 2 号（2015年 3 月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、第53巻・第 1 号（2015年11月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を、さらに第53巻・第 2 号（2016年 3 月）に掲載した後編 -1 では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編 -2 では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。

次号に掲載する予定の結論では、それまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌第52巻・第 2 号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌第52巻・第 2 号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く菅首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』 (朝刊)
- ・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』 (夕刊) 本誌第53巻・第1号 (中編) に掲載。
- ・コボちゃん (植田まさし) 『読売新聞』 (朝刊)
- ・ののちゃん (いしいひさいち) 『朝日新聞』 (朝刊) 本誌第53巻・第2号 (後編 -1) に掲載。
- ・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』 (夕刊)

『朝日新聞』の夕刊で連載されている「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)は、家庭的な要素を多分に含みながらも旺盛な時事性・風刺性を特徴とする4コマ漫画である。「地球防衛家」は、会社員の父親・トーサン、専業主婦の母親・カーサン、会社員の長女・ムスメ、小学生の長男・ムスコからなる4人家族で、作者自身の説明によれば、「フツウの生活を送りながらも、世の中をよくしたいと正義感に燃える、いわばどこにでもいるような家族」である。彼ら以外にも、近所の人々、会社の上司や同僚、学校の先生や同級生、皮肉屋の「カエル」など、多彩なキャラクターが登場する。連載がはじまったのは小泉政権時の2002年4月で、2012年4月に10周年を迎え、本論文執筆時点(2017年12月)でもなお継続中である。⁴³

後述するように、首相は「地球防衛家のヒトビト」に頻繁に登場し、ほとんど常連のキャラクターといってもいいほどである。連載10周年を迎える直前の2012年3月、過去の作品を1年ごとにふり返る特集記事が『朝日新聞』に掲載された際には、再掲された代表作10本のうち2本で首相(小泉純一郎と安倍晋三=第1次、以下略)が描かれている。この事実からも、「地球防衛家のヒトビト」にとって首相が欠かせない登場人物であることがわかる。⁴⁴

作者のしりあがり寿(本名・望月^{としき}寿城)は、新聞4コマ漫画に限らず多領域で活躍している漫画家である。1958年に静岡県静岡市でうまれたしりあがりは、1981年に多摩美術大学を卒業後、ビール会社に勤めながら漫画を執筆・発表しつづけた。1994年に退職後は漫画家業に専念している。他の代表作に、『流星課長』(竹書房、1996年)、『ヒゲのOL 薮内筐子』(竹書房、1996年)、『時事おやじ2000』(アスキー、2000年)、『弥次喜多 in DEEP』(エンターブレイン、2000年)、などがある。2011年3月の東日本大震災に際しては、直後から関連する諸問題を積極的に漫画化し、作品集『あの日からのマンガ』(エンターブレイン、2011年)や『ゲロゲロブースカ』新装版(エンターブレイン、2012年)などを出版している。また、自身の仕事について論じた『表現したい人のためのマンガ入門』(講談社現代新書、2006年)やエッセー集『人並みといふこと』(大和書房、2008年)など、漫画以外の著作も複数ある。第46回文藝春秋漫画賞(2000年)、第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞(2001年)、第15回文化庁メディア芸術祭優秀賞(2011年)、紫綬褒章(2014年)などの受賞(章)歴、そして神戸芸術工科大学などで教歴もある。⁴⁵

菅の在任期間中、3大全国紙の4コマ漫画のなかでもっとも多く首相を描いたのが「地球防衛家の

ヒトビト」であった。頻度・本数（4.89%＝368本中18本）とも、「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）のそれ（1.56%＝384本中6本）を約3倍も上回っている。単純に計算すれば1ヵ月に少なくとも1度は首相を描いていることになり、既述のとおり常連の登場人物だといっても過言ではない。「アサッテ君」とともに、先行研究が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分にうなずける。他方、残る3つの家庭的4コマ漫画——「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）、「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）、「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）——は1度も首相を描いておらず、その差は歴然としている。⁴⁶

同じ時事漫画であるにもかかわらず、首相を描く多寡で「アサッテ君」との間に大きな差が生じた要因として、2011年3月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故は見逃せない。本論文の中編で指摘したように、大震災以降、「アサッテ君」は1度も首相を描いていない。対照的に、「地球防衛家のヒトビト」では菅が登場する作品の3分の1を超える7本が大震災以後に描かれている。後述するように、作者のしりあがりは大震災とその余波を積極的に作品に取り入れており、さらにその延長線上で首相を描くことにも躊躇していない。このことから、同じ時事漫画でも「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別する先行研究が、菅の任期中も妥当性を維持していることがわかる。両漫画の特徴づけについては、以後も折に触れて言及する。

連載当初から「地球防衛家のヒトビト」は首相を描くことにかなり積極的であるが、なかでも菅は比較的「描かれやすい」首相であった。過去の首相とは在任期間が異なるため頻度を比較すると、表13が示すように菅の4.89%は鳩山に次いで高い。連載開始以来、どの首相も高い頻度で取りあげられているが、菅の描かれやすさは上位に位置している。追加的に、3大紙の4コマ漫画のなかで「地球防衛家のヒトビト」だけが首相に就任する以前から菅を描いている。この点は具体例とともに後述する。⁴⁷

表13 「地球防衛家のヒトビト」における首相を描いた作品の頻度と本数（首相別、上から頻度の高い順）

鳩山由紀夫	＝5.31%（207本中11本）
菅直人	＝4.89%（368本中18本）
麻生太郎	＝4.86%（288本中14本）
安倍晋三	＝3.72%（295本中11本）
小泉純一郎	＝3.10%（1,320本中41本）
福田康夫	＝2.72%（294本中8本）

次に、菅を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで有用なのが小泉から鳩山までの作品分析で先行研究が採用している準拠枠である。それによれば、「地球防衛家のヒトビト」は「自己主張型」の時事的4コマ漫画であり、首相の描き方のもっとも根本的な特徴は、首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる、という点であった。この旺盛な時事性と風刺性を下地としていくつかの表現パターンが見られたが、菅の作品を分析する上でも、先行研究が見いだした以下の諸点は引きつづき有効である。

- 1 地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる。
- 2 他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く。
- 3 非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる。
- 4 作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する。



図15 2010年9月9日号

以後、作品の分析は上述の諸点を軸にすすめる。なお、「地球防衛家のヒトビト」では1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多く、「アサッテ君」ほどはっきりとは類型化しにくい点をあわせて指摘しておく。

まず、現実としてあった首相の言動や政策をテーマに何らかの政治的風刺・批判を展開している点は、程度の差こそあれ、菅を描いた18本すべてに通底する基本的な特徴として重要である。わかりやすい例が図15と図16で、民主党代表選に現職の菅と小沢一郎元代表（前幹事長）が立候補したことについて、両者とも政治的な弱点をかかえている点を登場人物に語らせている。菅は、民主党のマニフェスト（2009年8月の衆議院総選挙時の政権公約）で触れられていなかった消費税増税に言及し、参議院選挙（2010年7月11日執行）での民主党の大敗の責任を問われていた。他方、小沢は資金管理団体の土地取引をめぐり検察庁の捜査対象とされていた。以下で取りあげる他の作品ほど政治的なメッセージは明確でないかもしれないが、両作品からは「地球防衛家のヒトビト」の旺盛な時事性と風刺性を見とることができる。なお、両作品の題材となっている代表選は2010年9月14日、菅が小沢を大差で破り、再選をはたして終わっている。

次に、先行研究が示した4つの表現方法に着目すると、地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる第1のパターンは、すでに例示した図15と図16をはじめ多数の作品で用いられている。図15ではトーサンとカーサン（1～2コマ）が、図16ではトーサンの茶飲み仲間（1～2コマ）が首相と小沢について真剣に議論し

ている。比類のなき彼らの饒舌さは、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることを補強する特徴の1つでもある。

第1の表現方法をわかりやすく用いているもう一例として、2011年3月12日号（図17）の作品がある。前原誠司外務大臣（3月6日に辞任）につづき、首相の政治資金管理団体も外国人から献金を受けていた問題について、トーサンたちが熱心に意見を交わしている。「今度は首相かよー!!」「もう何やってんだろー」（1コマ）や「こりゃ辞めなきゃ」「ダメだよこころ辞めたら」「いつまでたっても政治ができないだろ」（2コマ）という政治的議論の活発さは、他の新聞4コマ漫画では見られぬ「地球防衛家のヒトビト」ならではの特徴である。

ところで、図17でトーサンたちは喫茶店に置いてあるテレビの報道をきっかけに首相について語っているが、マス・メディアが伝える首相を庶民が見知る・語るという構図は、「地球防衛家のヒトビト」を含め新聞4コマ漫画で広く用いられる注目すべき特徴の1つである。本論文の中編で論じたように、同じ表現方法は「アサッテ君」の複数の作品でも見られたし、先行研究でもくり返し指摘されている。マス・メディアの報道対象として首相を描く作品は図17以外にも少なくとも3本（2010年11月27日号、2011年6月7日号＝図23、2011年7月19日号＝図31）あるので、そのつと言及し、かつ本誌次号に掲載する予定の結論でもあらためて論じる。過去の首相では、小泉を描いた41本中の少なくとも19本、安倍を描いた11本中の少なくとも7本、福田を描いた8本中の少なくとも4本、麻生を描いた14本中の少なくとも4本、鳩山を描いた11本中の少なくとも5本がテレビや新聞の報道に関連づけて首相を描いている。

「地球防衛家のヒトビト」では、大人ばかりでなく「子供」も積極的に首相について議論する。2010年9月4日号（図18）の作品では、前述の民主党代表選を題材にムスコとその友人が菅と小沢の違いについて語りあっている。この作品以外にも、図15では代表選について激しく論争した直後に一転して仲直りする両親をムスコが冷静に観察しているし（4コマ）、後述する2011年9月

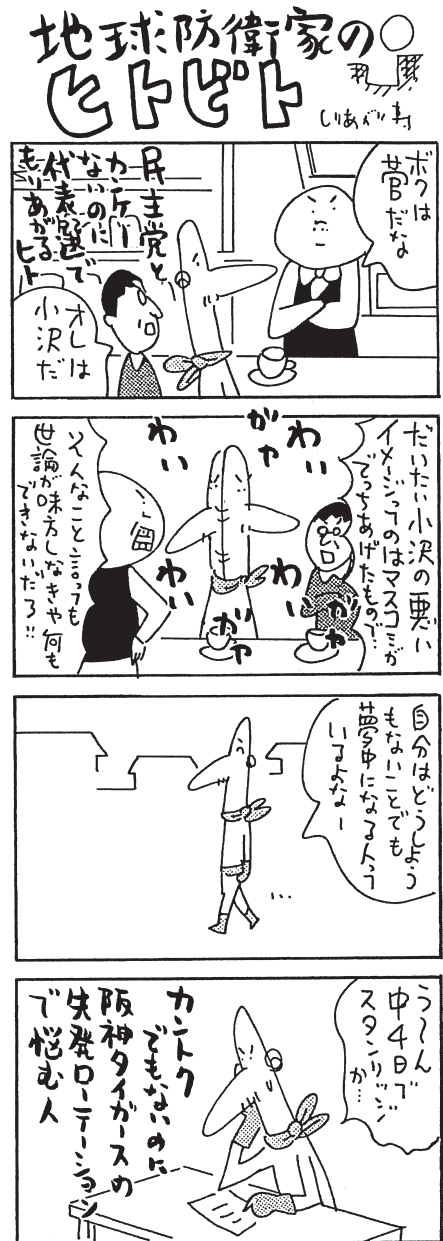


図16 2010年9月10日号

2日号(図20)の作品でもムスコが歴代の首相の名前を連呼している。「地球防衛家のヒトビト」では、小学生を含め老若男女が実に積極的に首相を批評・風刺する。

これらの作品は、最高権力者である首相の言動をあえて社会的地位では対極にある「子供」の視点からとらえることで、政治的な批評性・風刺性をいっそう高めていると考えられる。図18の「そんなこと[目つきの違い]で一国の総理がきまってたまるかい」「人は案外そんなもので判断するかも



図17 2011年3月12日号



図18 2010年9月4日号

よ」（4コマ）も、あえて選挙権のない子供にそう語らせることで、政権与党の代表者が必ずしも政策や指導力など本質的な要素で決まるわけではない点を暗に批判していると読める。安倍・福田の任期中にはそれほど顕著でなかったが、小泉・麻生・鳩山政権時にもムスコたち子供が首相を鋭く批判する作品が複数あった。

なお、主人公一家をはじめ登場人物が饒舌であることは、首相を描いた作品に限らず「地球防衛家のヒトビト」全体に見られる独自性の1つである。この点について漫画史研究者の清水勲は2009年の著書のなかで、「この作品は複雑多様化した現代の世相や政治を諷刺するためにセリフを多用し、成功している。現在、最も活力に満ちた新聞四コマの一つである」と評している。以下で例示する他の作品でも、地球防衛家の人々をはじめ市井の市民が実に活発に言葉を発している。⁴⁸

次に、他の政治家と対比・並列して首相を描くという第2のパターンも、18本中少なくとも6本の作品で認められた。小沢一郎が登場する図15・16・18の3本もそのなかに含まれる。先行研究が指摘しているように、小泉・安倍・福田の在任期間中は、この描き方は「地球防衛家のヒトビト」だけで採用される独自の手法であった。しかし、それ以降の麻生と鳩山の在任期間中には「アサッテ君」でも他の政治家と対比させて首相を登場させる作品が見られるようになり、菅の任期中も仙谷由人官房長官と小沢一郎とともに描く作品が1本ずつ（本論文中編・図3・4）あった。もっとも、以下で例示するように、「地球防衛家のヒトビト」のほうがはるかに継続的に、かつより多くの作品で他の政治家とともに首相を描いており、このパターンを得意としていることに変わりはない。

菅の在任期間中とくに存在感が際立っているのが小沢一郎で、図15・16・18の3本に加え2010年12月21日号（図19）の作品でも首相とともに描かれている。忘年会の出席をめぐる上司と新人部下の押し問答を、「出る出ないで90分よ」「菅 vs. 小沢だな…」（4コマ）と揶揄する内容である。⁴⁹

この作品の背景について説明しておくと、その前日の



図19 2010年12月21日号

12月20日、菅は小沢と会談し、資金管理団体の土地取引について説明するため衆議院政治倫理審査会に自発的に出席するよう強く説得したが、小沢はこれを拒否していた。それ以前に小沢は「国会の決定には従う」という旨の発言をしていたが、審査会は出席させる法的な強制力をもたない。上司と部下の会話（1～3コマ）はその経緯をさしている。実際にあった会談を題材に首相と小沢に対する政治的風刺・批判を試みており、「地球防衛家のヒトビト」の旺盛な時事性と風刺性がよくわかる作品である。



図20 2011年9月2日号

本論文にとってさらに重要なのが2011年9月2日号（図20）の作品で、現職の菅ばかりか、歴代および後任の首相をも含めて第2の表現パターンで描いている。「ねー、うし、とら」「うー、たつ、みー」（1～2コマ）につづき、「アベ、フクダ、アソウ」「ハトヤマ、カン、ノダー」（3～4コマ）ととなえるムスコに、カーサンが「十二支と総理をいっしょにするんじゃないよ」（4コマ）と注意する、という内容である。菅の辞任により、安倍晋三以降5人連続して1年ほどで首相が交代する事態になったことを揶揄している。なお、カーサンの左横にある「たしかに毎年かわってるけど」（4コマ）という文章は、吹きだしの外に書かれているため、カーサンの内面を表現した言葉、あるいは第4の表現パターンである作者自身によるナレーションと読むことも不可能ではない。この点については後述する。

図20は、菅政権の短命ぶりを揶揄していることもさることながら、安倍から鳩山までの首相経験者たち、そして菅の後任の野田佳彦までも一堂に描いている点で、本論文にとっては^{かつもく}刮目に値する。少なくとも小泉政権以降、複数の「首相」を1本の作品に登場させている新聞4コマ漫画は「地球防衛家のヒトビト」以外にはない。首相を描くことにおいてこの漫画がいかに突出しているかがわかる。後述するように、菅と鳩山の2人を描いた作品も1本（2011年6月7日号＝図23）ある。また、菅自身も首相に就任する以前、つまり鳩山政権時にすでに2度も登場（2010年6月5日号、6月7日号）している。3大紙の4コマ漫画のなかで、首相就任「前」に菅を描いているのも、やはり「地球防衛家のヒトビト」だ

けである。⁵⁰

上述の点に関連して、「地球防衛家のヒトビト」が「次期」首相である野田佳彦を菅の在任期間中に描いている点も同じように重要である。図20以外にも、民主党代表選（2011年8月29日）で野田が当選した翌日の8月30日号と9月1日号の作品において、それぞれテレビの報道をきっかけにして地球防衛家の面々が次の首相について語っている。将来、野田を事例とする研究がなされる際には分析に含められるべき作品である。⁵¹

このように、「地球防衛家のヒトビト」が描く「首相」が必ずしも現職にとどまらないという事実は、本論文だけでなく後続の研究にとっても無視できない大きな意味をもっている。新聞4コマ漫画の首相描写を十全に理解するためには、その首相の在任期間中だけを見ているのでは不十分で、就任以前にさかのぼる、あるいは離職後をも含めた連続的な流れを把握する必要があることを示すからである。今後の研究では、とくに政治家や政治問題を頻繁に扱う時事的4コマ漫画を分析する上で、当該首相の任期中はもちろん、その前後の作品は見落とすことのできない重要な分析対象となるはずである。⁵²

図20に関して最後に、ムスコの台詞にでてくる人物名がすべて「カタカナ」で表記されていることも、「地球防衛家のヒトビト」の首相描写を理解する上で看過できない。というのも、安倍（第2次）政権時に衆院特別委員会の法案審議を傍聴した際、『朝日新聞』の取材に対して作者は、難解な用語などを「ひらがなにすると重要なことがマヌケに見えて面白くなる」と答え、批判・風刺の技法としてあえて漢字を使わない場合があると語っているからである。この発言が掲載されたのは2015年6月6日号の記事であるため、小泉から鳩山までを扱った先行研究では参照されていないが、今後の研究では分析視角の1つとして念頭に置かれるべきである。⁵³

つづいて、第3のパターン、つまり非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる手法も多用されており、菅を描いた18本中10本もの作品が該当する。先行研究が示しているように、また本論文の中編でも指摘したように、同じ描き方は「アサッテ君」でもしばしば採用される。

現実にはない首相描写をしている好例として、2010年7月14日号（図21）と2010年8月28日号（図22）の2本がある。前者は、7月11日に執行された参議院選挙で民主党が大敗したことについて、その原因は事前に勝敗を予想した「タコ」だと結論づける首相（4コマ）を描いている。この「タコ」は、サッカー・ワールドカップ（南アフリカ大会）の勝者予想で話題となったドイツの水族館の「パウエル」をさしており、「アサッテ君」にも登場している（本論文中編・図4）。後者は、参院選につづき民主党代表選を控えた首相が、夏休みの宿題をやり残したムスコのように「政治の宿題」（4コマ）を放置・放棄している様子を描いている。いずれも、首相の言動は現実のものではなく、フィクション的な設定で滑稽な姿を描くことで政治的な風刺を利かせている。

現実にはありえない状況設定で首相を皮肉る手法は、政治批評そのものを目的とする1コマの風刺漫画と類似性があるが、この点も「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事漫画であること

もきわめて辛辣に批判している。なお、図23では、別の政治家とともに首相を描く第2の表現パターンも併用されていること、またテレビで報道される首相を主人公一家が見る・語るという構図（4コマ）が使われている点にも留意する必要がある。図24の「なでしこジャパンワールドカップ優勝」（1コマ）は、女子サッカーのワールドカップで「なでしこ」を愛称とする日本代表チームがアメリカを破って優勝したことをさしている。⁵⁴



図23 2011年6月7日号



図24 2011年7月20日号

参考までに、図23・24の背景にある、菅の進退問題をめぐる一連の経緯を概説しておく。まず図23について、辞任を強く迫る鳩山由紀夫前首相に対し、菅は震災対応で「一定のめど」がついた段階で辞任する意向を示すことで譲歩し、その結果として野党が提出した内閣不信任決議案が衆院本会議で否決されていた(6月2日)。しかし、その直後から「一定のめど」をめぐる両者の見解の相違が表面化し、6月3日には鳩山が「ペテン師まがいのことを総理がしてはいけない」と強く非難する事態

にまで発展していた。しかし、その後も菅は辞任の時期を明言せず、図24で描かれているように、国民の支持も失っていった。2011年7月の内閣支持率(朝日新聞社の世論調査、本論文前編・表8参照)は発足後最低の15%であった。

第4の表現パターン、つまり作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する作品には、少なくとも1本が該当する。東日本大震災後、はじめて首相を描いた2011年6月4日号(図25)の作品がそれである。一見してわかるように、この作品には「総理のイス」(2コマ)にしがみついた架空の首相の姿が描かれており、第3のパターンも併用されている。

図25は図23・24とほぼ同じ文脈で辞任しない菅を批判しているが、本論文にとってより重要なのは、作者自身のナレーションと読める文章が書き込まれていることである。「いろいろな失敗にも負けず」(1コマ)、「党内からの反発にも負けず」(2コマ)、「しがみついた力だけは誰にも負けない!!」(3コマ)がそれである。トーサンが最後に「菅総理のキャッチフレーズをつくったぞ」(4コマ)とのべていることから、それらをトーサンの台詞と解釈することもあながち不可能ではない。しかし、だとすれば吹きだし内には書かれていないのは不自然であるし、かといって菅首相自身の発言でもないことを考えると、作者自身のナレーションととらえるのが妥当である。補足的に、明確に作者のナレーションとはいえない切れないものの、前述した図20にも「たしかに毎年かわってるけど」(4コマ)という登場人物の台詞とは考えにくい言葉が書き込まれている。

ナレーションによる風刺・批判は、他の漫画には見ら

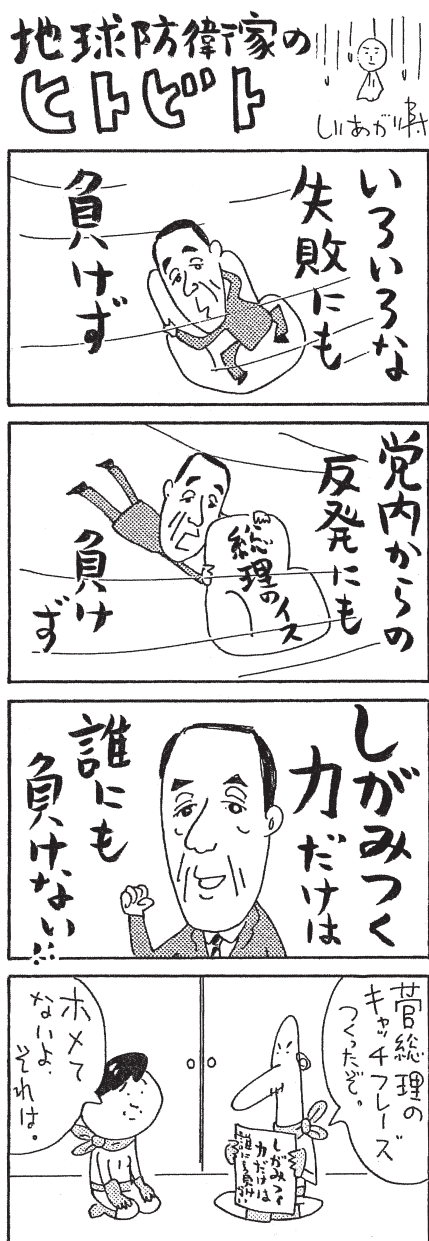


図25 2011年6月4日号

れぬ「地球防衛家のヒトビト」だけの独自性であり、先行研究がこの漫画を「自己主張型」の時事的4コマ漫画と特徴づけてきた最大の理由である。登場人物の台詞ではなく作者自身のナレーションとして提示される文章は、漫画という形式をとってはいるが、ほとんど作者自身の意見表明と読むことができる。その意味で、ナレーションは「自己主張型」の真骨頂を示す表現手法なのである。⁵⁵

上述の論点を補強する重要な事実として、菅を描いた作品ではないものの、ナレーションを使って前任者の鳩山由紀夫を酷評している作品があることを付言しておく。鳩山が正式に離職した（つまり菅が首相に就任した）翌日の2010年6月9日号（図26）の作品がそれで、試験で30点しかとれなかった小学生らしき子供の親が「ウチの子はホメないとのびないタイプで…」（3コマ）と語る場面が描かれたのち、うつむいて退場する鳩山の横に「このヒトもそうだったかもしれない…」（4コマ）という一文が書き込まれている。最後の4コマ目に登場するのが鳩山だけであること、また吹きだしが描かれていないことから、これが登場人物ではなく作者自身の言葉であることに疑問の余地はない。政治献金をめぐる疑惑や沖縄県のアメリカ軍飛行場問題などで批判を浴びつづけた末に突如として辞任した鳩山前首相に対し、登場人物の言葉を介さず、ほぼ直接的に政治批評をぶつけている。現職の菅を描いた作品ではないが、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることを象徴する1本である。

なお、ナレーションに近い表現方法として、作者はしばしば皮肉屋の「カエル」に自身の見解を代弁させる場合もあるが、菅の在任期間中にこの方法で首相を描くことはなかった。過去には、小泉政権時に2本（2004年5月7日号、2005年3月9日号）、福田政権時に1本（2008年9月5日号）、鳩山政権時に1本（2009年11月6日号）、それぞれ「カエル」を登場させて首相を描く作品があった。⁵⁶

ナレーションを使った首相批判からはやや離れるが、「自己主張型」の時事漫画としての「地球防衛家のヒトビト」の特徴は、2011年3月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故を機にいっそう顕



図26 2010年6月9日号

著になっている。すでに指摘したように、大震災とその余波を題材とする作品は、時事的な「アサッテ君」をはじめ、家庭色が強い「ウチの場合は」・「コボちゃん」でも数多く描かれている。しかし、震災をめぐる一連の問題を作品に取り入れようとする積極性において、「地球防衛家のヒトビト」は他の漫画をはるかに凌駕している。

まず、作者のしりあがり寿は2011年4月中旬に岩手県大槌町に出むき、被災者の支援に取り組んで

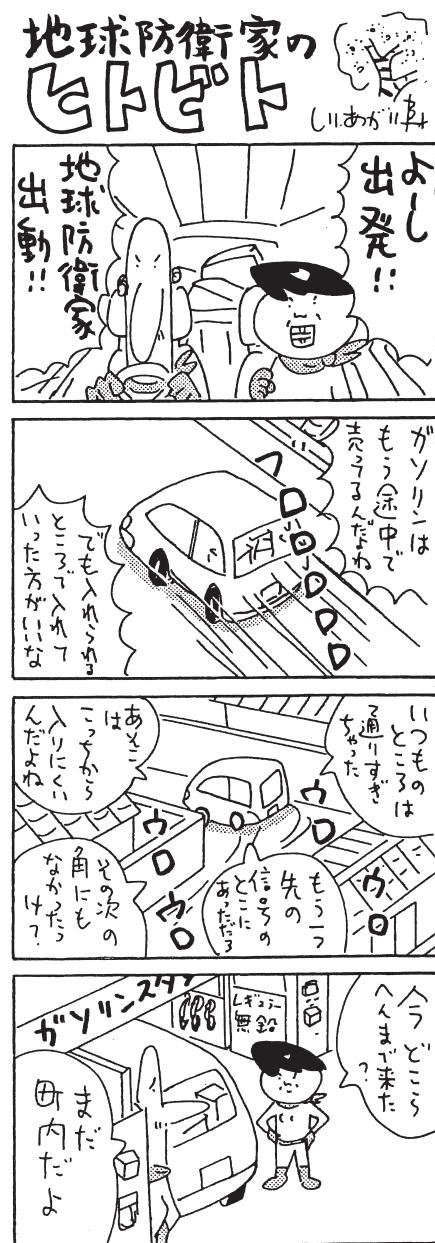


図27 2011年4月22日号

いる。大震災を漫画の題材にするだけでなく、被害を受けた現場を実際に回り、避難所慰問やトイレの掃除など救援活動をしているのである。作者はその後も継続的に、ボランティア活動のため被災地を訪れている。地震発生から約1年後の『朝日新聞』のインタビューで彼は、『地球防衛家』を連載してきた以上、これはもう出動するしかない。行って、見たこと感じたことを描きました」と答えている。2014年に紫綬褒章を受けた際にも、「東京では震災が忘れられて来ている」との懸念を示し、「時事漫画が震災を描かないわけにはいかない」と発言している。⁵⁷

そればかりか、作者は被災地での実体験を積極的に「地球防衛家のヒトビト」に取り入れることで、「自己主張型」の本領を遺憾なく発揮している。漫画内で現地を訪れたのはトーサンとカーサンの2人で、2011年4月22日号(図27)の作品で自宅を出発し、5月2日号(図28)の作品から津波に襲われた地域に入り、ボランティア活動をはじめている。自宅を出た翌日の4月23日号から漫画タイトル横に「出動中」の文字が書き加えられ、「出動」は5月21日号の作品で帰宅するまで継続している(実際の作者の現地訪問は3泊4日)。この間の執筆活動について、『朝日新聞』(2012年1月1日号)に掲載されたインタビューでしりあがり寿は次のように語っている。「新聞の4コマ漫画というのは、ある程度笑わせないといけないと思ってましたが、今回は笑えなくてもいいやと。考え方が自由になりましたね」。さらに、作者は2012年5月26日に日本新聞博物館で開かれたシンポジウムでも、「自分が行って見たものだったら、それがいかにより一部のことでもなくても、想像ではなくて真実なの

加えて、日本における今後の原子力発電のありようについても作者は比較的にはっきりと自身の見解を明らかにしており、この点でも「自己主張型」らしさを際立たせている。わかりやすい例が2011年4月12日号(図29)の作品で、一見して「盛りあがる反原発デモ」(3コマ)を好意的に取りあげ



図29 2011年4月12日号

ていることがわかる。なお、しりあがりはエッセーやインタビューでも、「もうとてもじゃないが原発には賭けられない、ボクだけじゃなく多くの人が多少の利便性は失っても安心できる再生可能エネルギーに賭けようとしている」、「原発は一刻も早くなくなればいいと思います」とのべており、漫画以外でも原発に批判的な立場を表明している。本論文が分析対象とする新聞4コマ漫画家のなかで、原発のように国論を二分する難問についてここまで積極的に、かつはっきりと自身の態度を明らかに

しているのは、しりあがりだけである。⁵⁹

もちろん、首相を描いた18本のなかにも、原発に対する作者の否定的な態度をうかがわせる作品がある。2011年6月23日号(図30)と7月19日号(図31)の2本がそれで、前者は第3の表現パターンを使い、菅が宇宙船「日本号」を「再生可能エネルギーへ……」「進路変更」(1~2コマ)しようとするが、自分だけが飛びだしてしまう、という内容である。後者は「脱原発を……」(1コマ)と発言する首相をテレビで見たトーサンとカーサンが、「脱菅」(2コマ)や「脱原子力利権」(2コマ)をはじめ日本や自分たちの将来について語りあう、という内容である。いずれの作品も、菅の「脱原発」路線そのものには理解を示しつつも、首相が肝心の指導力を欠いている点を突いている。菅は静岡県の浜岡原発を停止するよう中部電力に要請(5月6日)するなど原発に批判的で、7月13日の記者会見では「原発に依存しない社会をめざす」と明言していた。しかし、前述したように菅の辞任を求める声は高まる一方で、支持率も低下するばかりであった。

菅を示すシンボル(画像・文字・画像と文字)に目を転じると、文字の使用が多いものの、特別視するほどの特徴があるとはいえない。

一見してすぐ目につくのは、文字で描かれることが18本中16本(文字のみ=7本、併用=9本)と多い点である。「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用を首相別にまとめた表13が示すように、小泉以降の首相で文字の使用が画像を上回るのは菅だけである。安倍が突然に辞意を表明した直後、しりあがり作品中(2007年9月15日号)に自身とおぼしき「某漫画家」を登場させ、次は

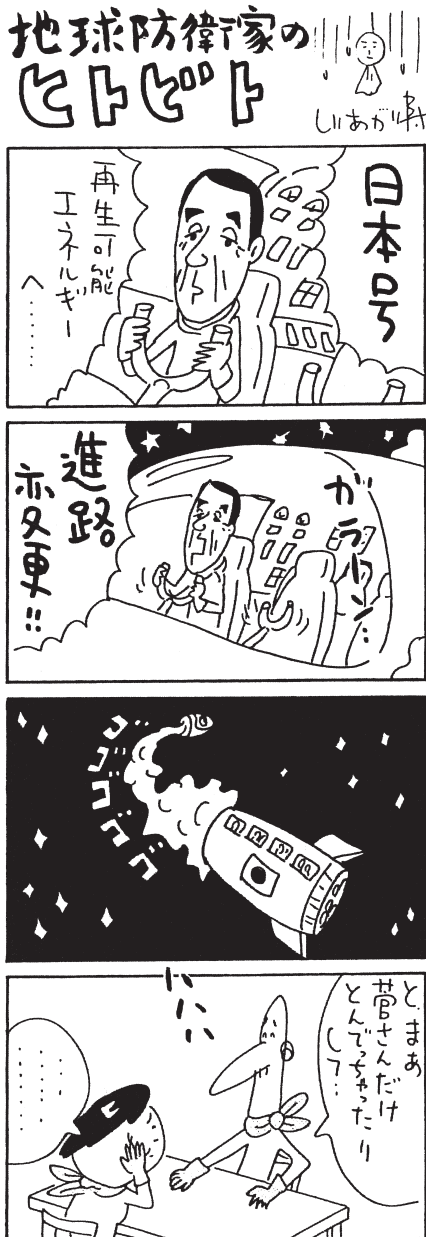


図30 2011年6月23日号

「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせている。作者には画像を使って首相を描く意欲があることがわかるが、にもかかわらず文字が多用されているということは、歴代の首相と比べ菅は「描きにくい」容貌をしていたといえるかもしれない。補足的に、「アサツテ君」（『毎日新聞』朝刊）でも、わずかではあるが文字の使用が多かった（画像のみ＝1本、文字のみ＝2本、併用＝3本、本論文中編・表12参照）。⁶⁰

とはいえ、けっして画像の使用が少ないわけではなく、18本中11本（画像のみ＝2本、併用＝9本）と過半数で使われていることを考えれば、菅を描くシンボルに極端な偏りがあるとまではいえない。先行研究も指摘しているように、本来4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、とも考えられる。「地球防衛家のヒトビト」を含め、小泉から菅までの首相を描いた4コマ漫画すべての作品のシンボルを総計すると、画像のみ＝59本、文字のみ＝64本、併用＝53本と、むしろ文字が画像を若干上回っている（本論文前編・表10参照）。少なくとも、画像・文字の使用比率において、「地球防衛家のヒトビト」による菅の描き方がいちじるしく突出しているわけではない。

いずれにせよ、本論文の前編でも指摘したように、新聞4コマ漫画のシンボル使用については未知の部分がお多く、今後もさらに研究を継続し、分析を深める必要がある。

これまでの分析から、もともと他の漫画よりも圧倒的に多く首相を描いていた「地球防衛家のヒトビト」は、菅の在任期間中もこれまでと同じく、あるいはそれ以上に積極的に、かつ旺盛な時事性・風刺性をもって首相を描いており、その描き方も多様で独自性に富むことがわかった。総選挙で勝利し政権交代を実現させた民主党初の首相、鳩山由紀夫ほどではないが、自民党の前任者の誰よりも頻繁に菅を描いている。そして、現職ばかりか歴代や後任の「首相」まで登場させ、彼らを果敢に風刺・批判している。先行研究が示した首相描写のパターンわけについても、十分な妥当性があることを確かめる



図31 2011年7月19日号

表14 「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用（首相別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
小泉	16本	14本	11本
安倍	4本	1本	6本
福田	2本	1本	5本
麻生	4本	3本	7本
鳩山	6本	2本	3本
菅	2本	7本	9本
合計	34本	28本	41本

ことができた。

また、先行研究が特徴づけているように、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることも、本論文でよりいっそう確証づけることができた。ナレーションを使っていると読める作品（図25）が少なくとも1本あり、風刺の対象は菅ではなく鳩山ではあるが明らかにナレーションを用いている作品（図26）も1本あった。政治批評・風刺を積極的に展開し、かつ作者自身の見解を比較的にはっきりと示すこれらの作品は、「地球防衛家のヒトビト」だけに見られる独自性である。登場人物が実に饒舌に首相を批評・風刺することや、1コマの政治風刺漫画のように架空の首相を滑稽に描く作品が多いことも、「自己主張型」の特徴を補強している。しりあがり自身、新聞社のインタビューで「僕は本当はあまのじゃくでシニカル」、そして「社会がこわばらないよう、権威に対して、右からも左からも、痛いところを突くのが時事漫画の役割」であるとした上で、「普通の人が感じることを表現してきた」と語っている。時事漫画家としての自覚をもち、自分なりの社会観を意識的に表明しているのである。⁶¹

さらに、2011年3月の東日本大震災直後、作者が実際に被災地を訪れ、現地での実体験を作品に取り入れ、また漫画以外の領域でも原発問題について活発に発言している事実は、「自己主張型」らしさをよりいっそう際立たせる。同じ時事漫画でも、「世論反映型」の「アサッテ君」は震災後、1度も首相を描くことがなかった。対照的に、「地球防衛家のヒトビト」は震災対応や原発問題に関連づけて首相を批判的に描いている。過去に例のない大災害を機に、かえって「自己主張型」の特徴を強めている。

最後に、大震災後の作品を含め「自己主張型」の特徴が顕著であるという点で、「地球防衛家のヒトビト」はジャーナリズムの権力監視・番犬機能を意識的に発揮しようとする4コマ漫画だといえる。先行研究も指摘しているように、作者のしりあがり自身もそのことを認めている。たとえば、2004年の『朝日新聞』のインタビューで彼は、「もう少しマシな世の中にしなくちゃって、今、みんな考えてるんじゃないか。……そういうヒトビトの代表のつもり、かな」と語っている。その4年後に出版したエッセー集でも、「自分の笑いは『覚醒』」、つまり権威や権力を引きずり降ろすような

「プラスの価値をリセットする」^{かいぎやく}諧謔であると書いている。作者は同じエッセー集で、「新聞に載る四コママンガやちょっとした時事ネタのカットを描くとき、それぞれの事件に対する『人並み』の反応を探す」とも書いているが、この姿勢は一般庶民に代わり権力者の言動に目を光らせる、つまり原初的なジャーナリズムの権力監視・番犬機能に通じるものだといえる。そして、その特徴は大震災を機にさらに色濃くなったのである。⁶²

注

43 「新連載マンガ『地球防衛家のヒトビト』 来月1日から」『朝日新聞』2002年3月25日夕刊。

44 「地球防衛家のヒトビト 笑って憂えて10年」『朝日新聞』2012年3月27日夕刊。

45 しりあがりの経歴については、「シリーズ人間 不安だから 怖いから『未来』が描ける」『女性自身』2011年12月27日号：62～68が詳しい。

46 菅を描いた18本は、以下の号に掲載されている。2010年7月14日号、2010年8月28日号、2010年9月4日号、2010年9月9日号、2010年9月10日号、2010年11月26日号、2010年11月27日号、2010年12月6日号、2010年12月21日号、2011年3月3日号、2011年3月12日号、2011年6月4日号、2011年6月7日号、2011年6月8日号、2011年6月23日号、2011年7月19日号、2011年7月20日号、2011年9月2日号。

47 「地球防衛家のヒトビト」における菅の「描かれやすさ」を説明する上で、単純に菅の外見が「描きやすい」ことを一因とすることは、あながち荒唐無稽ではない。なぜならば、安倍晋三の辞任表明から3日後の2007年9月15日号の作品で、「次の首相」は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と願う「某漫画家」が描かれているからである。この「某漫画家」が作者自身であることに疑問の余地はない。しかし、外見による「描きやすさ（にくさ）」はすぐれて主観的な要素であるため、論理性・実証性を十分にもった説明をするためには、上の作品だけでは明らかに材料不足である。「地球防衛家のヒトビト」で使用されているシンボルを見ても、画像（似顔絵）のみ＝2本、文字のみ＝7本、画像と文字（併用）＝9本で、画像よりもむしろ文字のほうが多用されている。

48 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、174。

49 小沢一郎を単独で描いている作品も別に2本（2010年9月16日号と2010年10月9日号）ある。

50 図20・23以外にも、菅の在任期間中に過去の首相を描いた作品がもう1本ある。2010年7月1日号の作品がそれで、菅自身は登場しないが、夏の国政選挙で演説をする小泉純一郎・安倍晋三・麻生太郎の3人が描かれている。

51 補足的に、「首相」に限らず有力な政治家を描くことそれ自体に「地球防衛家のヒトビト」はきわめて積極的である。菅の在任期間中にも、外国人を含め多くの政治指導者が作品に登場している。本文中ですでに言及した人物以外で本論文の定義に合致する描かれ方をしている政治家として、東国原英夫宮崎県知事（2010年8月31日号）、前原誠司外務大臣（2010年11月11日号）、中国の胡錦濤国家主席とアメリカのバラク・オバマ大統領（2011年1月21日号）、与謝野馨経済財政大臣（2011年1月24日号）、松本龍復興担当大臣（2011年7月5日号）、奥石東民主党参議院議員会長（2011年9月1日号）、などがいる。

52 本論文執筆時点で、首相辞任後に菅を描いている作品は確認できていない。

53 「ウオッチ安保国会 『憲法のギリギリ』議論 見えた」『朝日新聞』2015年6月6日。

54 その他、第3の表現パターンで首相を描いている作品として、2010年11月26日号、2010年11月27日号、2010年12月6日号、2011年3月3日号、2011年6月4日号（図25）、2011年6月23日号（図30）、がある。

55 もっとも、間違いなくナレーションを使って首相を風刺・批評していると断言できる作品は「地球防衛家のヒトビト」でさえも非常にまれで、過去には小泉・安倍・麻生の在任期間中にそれぞれ1本ずつ（2005年10月20日号、2007年9月13日号、2009年7月22日号）、合計で3本しかない。ただし、鳩山の在任期間中には作者のナレーションと読むことが十分に可能な作品が1本（2009年11月27日号）あった。

56 ただし、菅の任期中にも「カエル」が登場する作品は2本あり、本論文が定義する「首相を描いている作品」にはあてはまらないものの、いずれも首相を含む政治家一般を強烈に風刺・批判する内容である。まず、

2011年2月23日号の作品は、冬眠中のカエルが目をさましテレビをつけると、「内閣支持率」や「造反」や「辞任」のニュースばかりで、「日本のあまりの変わらなさにさらにビックリ…」する、という内容である。すでに何度か言及しているように、テレビが報道する政治家をカエルが見る・語る構図が使われている点も見逃せない。2011年3月8日号の作品は、道端でお金を拾ったカエルが「いつも大変そうな政治家さんにあげよう」と事務所に届けると、「わーカエルが献金していった!!」「法的には大丈夫か?」「早くカエルに返してこい」などと大騒ぎになる、という内容である。

57 「地球防衛家のヒトビト 笑って憂えて10年」『朝日新聞』2012年3月27日夕刊、「春の褒章 都内75人 紫綬褒章 漫画家 しりあがり寿さん」『読売新聞』（都内版）2014年4月28日。しりあがりの被災地訪問については、自身の手記、しりあがり寿「大きな賭けに負けたボクたちは」『朝日新聞』2012年5月24日夕刊も参考になる。

58 「理想描くチャンス 自分たちで動き出す」『朝日新聞』2012年1月1日号（第4部「東北の元気」）、「マンガ家が描く原発と新エネルギー 東京新聞フォーラム」『東京新聞』2012年6月14日。

59 しりあがり寿『みらいのゆくすえ』（春風社、2011年）、19、しりあがり寿「この決定 勝ち負けはない」『朝日新聞』2012年6月17日。

60 2007年9月15日号の「地球防衛家のヒトビト」の作品分析は、本論文前編の後注3で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）」でおこなっている。

61 板垣麻衣子「鋭い視線の『へたうま』 漫画家 しりあがり寿さん」『朝日新聞』2014年4月28日、「春の褒章 都内75人 紫綬褒章 漫画家 しりあがり寿さん」『読売新聞』（都内版）2014年4月28日。

62 河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』 連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日、しりあがり寿『人並みといふこと』（大和書房、2008年）、65、202。

【Abstract】

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 4):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2010–2011

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Naoto Kan during his tenure, from June 8, 2010 to September 2, 2011.

As the fourth installment of a multiple-part series, this article (Part 4) analyzes qualitatively how *Asahi*'s "Chikyu Boei Ke no Hitobito" (The Earth-Saver Family) depicted Prime Minister Kan.

The upcoming final installment will sum up the findings of the entire series and present conclusions.